

関西大学博物館所蔵の重要文化財 「縄文鉢形土器」の穿孔について

山口 卓也

はじめに

関西大学博物館所蔵で、第1展示室に常設展示されている河内国府遺跡出土縄文鉢形土器（重要文化財：昭和39年5月26日 考第266号：昭和49年11月7日再交付）は、本山彦一氏により大正7年に発掘されたものである。

土器は、発掘当時に復元が行われたが、接着剤にニカワが使われ、隙間には石膏が充填されていた。大正年間の発掘以来、約90年が経過し、修復部の接着部や石膏に経年による劣化が生じていた。特に片側の波状口縁周りの接合が激しく劣化しており、接合にぐらつきが生じ、一時、接着剤の補強を行なったらしいが、土器の内面を汚したのみで、ほとんど補強効果を発揮しておらず、土器の観察を妨げていた。

今後、接着剤の劣化や石膏の脆弱化により、土器が崩壊する可能性も考えられる状況であったので、関西大学博物館では、安全な保管・展示を続け、より良好な器面を見せるためにも、全面的な修理を行いたいと考えた。

重要文化財指定品であることから、文化庁の指導を受け、東京文化財研究所と関西大学との間で「関西大学博物館所蔵 重要文化財 縄文鉢形土器の復元修理」の調査研究の委託契約を締結した。修復の経緯と技術的問題については、同時収録の犬竹論文を参照されたい。修復は、平成18年9月に開始し、平成19年3月に完了している。

本稿では、この鉢形土器の修復作業時に判明した穿孔についての知見を取り上げたい。

1. 国府遺跡発掘と本山彦一氏

縄文鉢形土器は、縄文時代前期後半の北白川下層Ⅱb式で、高さ14.8cm 径15.6cm 胴部厚4mmを計る。大正7年4月、大阪府藤井寺市国府遺跡の本山彦一氏による第4次調査時に、屈葬人骨大串第18号人骨に伴って出土した。

国府遺跡は、石川と大和川が合流する地点の西側の台地上に所在し、旧石器時代から中世に至る集落遺跡である。大正6年、京都帝国大学考古学研究室の浜田耕作によって初めて本格的な発掘調査が実施された。大正年間に鳥居龍藏、本山彦一などが、戦後には大阪府教育委員会などが発掘し、今まで30数次の発掘調査が行われた。昭和49年に国指定史跡となっている。

調査成果としては、字「衣縫（いぬい）」小字「骨地（ほねじ）」において縄文時代から弥生時代にかけての人骨がおおよそ90体検出されたこと、その下層から旧石器時代の石器群が発見され

たことなどがあげられる。小字「骨地」の由来は、昔からたくさん骨が埋まっていることが知られていたからであろう。

大正年間で、国府遺跡の「衣縫」「骨地」周辺から、大正年間に70体ほどの人骨が出土している。その多くが縄文時代の屈葬であり、西南日本では愛知県吉胡貝塚（300体以上）、岡山県津雲貝塚（約200体）、熊本県の轟貝塚などに続く出土数である。学史的に、大正期の考古学・人類学的な研究テーマが人種論であったため、このころ日本各地で盛んに人骨蒐集が行われたのであろう。埋葬は、ほぼ半数が縄文時代前期（43体）で、縄文晩期や弥生時代、古墳時代初頭のものも少数認められているという（天野 2001）。

縄文時代前期のものは、成人埋葬ばかりであるが屈葬であり、その中に一对の珧状耳飾を付けた遺体が6体ある。「抱石葬」や「甕被葬」や副葬土器など伴った例が多くある。男性21体、女性18体、不明4体とされている（池田 1988）。

大部分が大正年間に発掘されたため、人骨の回収に興味が集申し、層位や遺構や共伴遺物、埋葬姿勢の記録が充分ではない。現在利用できる報告文は、調査担当者の論文と大阪毎日新聞の記事（岩井 1917, 18）、京都大学の発掘調査報告書（濱田 1918）がある。今日的な調査研究方法には及ばない部分があるが、縄文時代の埋葬習俗研究において重要な遺跡である。

本山彦一氏は、大正6年に第3次、大正7年に第4次調査を行ない、34体の埋葬を発掘している（末永 1935）。発掘調査は、大阪毎日新聞紙上に速報で報じられ、京都大学の浜田耕作教授など学会の権威が参加した。報道と発掘調査がリンクする考古学調査の「はしり」ともいえる。

2. 縄文鉢形土器と大串第18号人骨（第4次第3号人骨）

大正7年4月に本山彦一氏が行った第4次調査で見つかった大串第18号人骨は、ほぼ全身の骨格が残った仰臥屈葬（仰向きの姿勢で、小さく手足を折りたたむ）で、頭部を東南東に向ける。頭部に縄文土器破片10片を被せ（甕被葬）、珧状耳飾をつける。

遺体の胸上に鉢形土器を横倒した状態で乗せる。発掘時には破損状態であったものを、復元して完形にしてから写真撮影したことが、大阪毎日新聞大正7年8月17日、岩井擁南「河内国府第四回発掘調査（九）A地域の人骨」に記載されている。厳密な土器の姿勢は確認できないが、出土時の状況から横倒しだったことがわかる。いわば、鉢形土器を「のせる」、または「抱いた」状態といえる（第1図）。

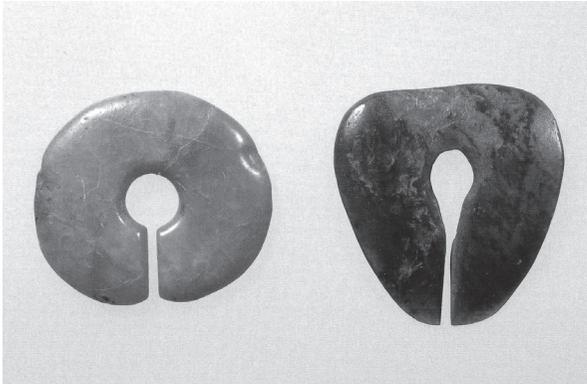
胸部左右にはさむように長幅20数cm程、厚5-7cmほどの花崗岩自然石があり、石を抱く「抱石葬」が、埋葬遺体の腐敗などにより位置関係が動いている可能性がある。胸部に石と鉢形土器の両方が置かれた状態となっていたのであり、「抱石葬」という個別定義では十分に説明できない。「抱鉢・抱石葬」と呼称するべき状態である。

埋葬は屈葬姿勢であるが、遺体が墓穴に納められていたか、大正時代の発掘記録が充分でなく不明である。発掘時の写真をみると、人骨周辺がくぼんで発掘されており、おそらく墓穴があったと思われる。

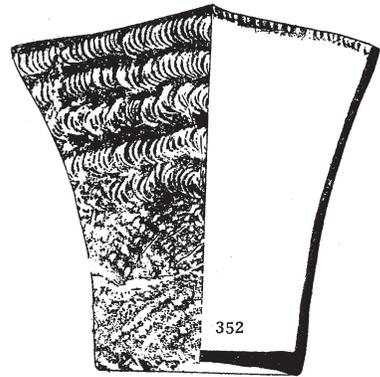
人骨は、現在大阪大学の総合学術博物館に保管されている。成人男性の可能性が高いとされている（池田 1988）。



第1図 第18号人骨発掘状況



第2図 玦状耳飾



第3図 本山考古室要録（末永 1935）
の実測図

第18号人骨は、国府遺跡の縄文時代前期の埋葬の中で、耳飾りをつけ、土器片で頭部を覆い、石を抱き、さらに土器を「のせる」「抱かせる」など、最も複雑な埋葬を行った事例である。

3. 重要文化財の修理と底部穿孔の発見

平成18年9月、修理のため鉢形土器を関西大学博物館から東京文化財研究所修復技術部に搬入し、関西大学博物館の高橋隆博館長、山口卓也学芸員と技術修復部の加藤寛部長（当時）、犬竹和修復師、文化庁美術学芸課の土肥孝主任調査官が集まり、重要文化財、鉢形土器の現状を確認、修理の方法を検討した。

この際、鉢形土器の底部に紡錘形の石膏復元部分があることが注目され、この部分が単なる破損や欠損ではなく、人為的な「穿孔」である可能性が指摘されたので、土器の修理にあたり、古い石膏復元を除去して鉢形土器を分解した時点で、よく観察することとした。

東京文化財研究所の修復技術部で修理が進み、観察できる状態となったので、2006年12月、関西大学博物館の山口が観察し、底部に穿孔があることを確認した。底部に穿孔があることが確認されたので、関西大学博物館と東京文化財研究所、文化庁の三者で協議し、鉢形土器の修理は、以前の状態には戻さずに、この穿孔部分が観察できるように修復することとした。

石膏復元部分は、発掘時の写真にある復元以降に行われたもので、おそらくその当時には、底部穿孔の事例が知られていなかったもので、単なる欠落と理解されたのであろう（第3図）。

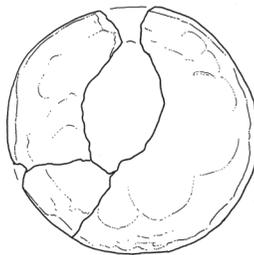
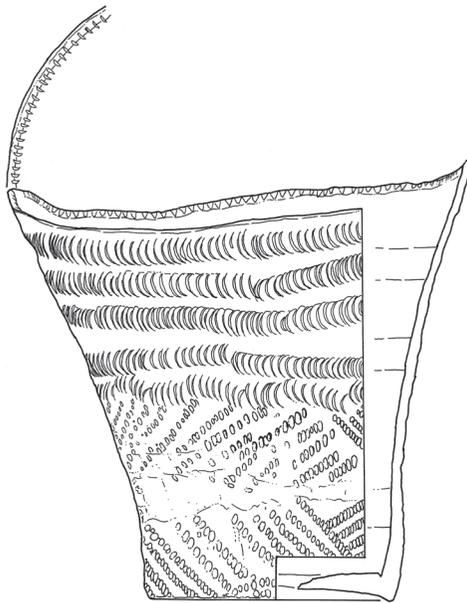
4. 鉢形土器の底部穿孔

鉢形土器の底部に見つかった穿孔は、幅2.7mm長さ4.7mmほどの楕円形である（第4図・第5図）。また、新しい断面の欠落が底面から胴部方向に台形状に生じている（第8図A部分）。

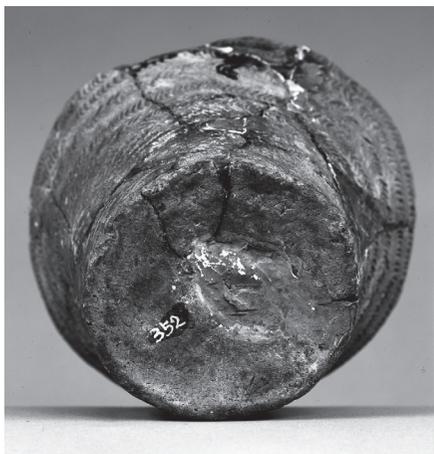
穿孔の状態を観察すれば、厚さ5mmほどの底部を、外から内への加撃により穿孔したことが判明した。底面には、穿孔は中央にある。この土器の底部は薄い積層でできているが、底面には剥離状破碎痕はなく、きれいな平面となっている。一方、内面では、穿孔の周りに大規模な剥離状破碎痕が広がる。詳細に剥離状破碎痕の切り合い関係を観察すると、破碎痕が中央から端に向かって末広がりに広がっていった状況が観察できる。また、楕円形の穿孔の長軸上下二方向にむかって破壊が進んだように読み取ることができた（第8図）。加撃が底面中央に行われて、破壊が楕円形に広がることから、先端がややとがった加撃具で、紡錘形に穿孔したことがわかる。おそらく先のとがった棒先か石斧のようなもので一撃したのであり、土器の通常の破壊ではなく、意図的穿孔とみて間違いのない。この加撃と破壊の余波が、A部分にひび割れなどを及ぼした可能性が高く、胴部立ち上がり角を剥離させている。



第4図 鉢形土器底面写真



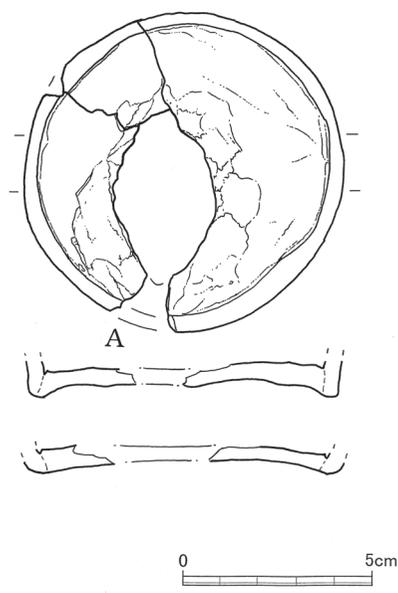
第5図 鉢形土器底面実測図



第6図 修復前と修復中の縄文鉢形土器



第7図 底面内面の剥離状破碎痕写真



第8図 底部内面の剥離状破碎痕

縄文鉢形土器は、土器破片の回収状況からみて、少なくとも穿孔時に一気に破壊されたのではなく、埋葬時まで器形を保っていたとみられる。胴部側面に破片の二次的な欠落が生じているが、この部分の土器片は回収されておらず、欠損発生が埋葬時の遺体上への設置時の投げ落としなどによるのか、発掘時の回収漏れなのかは分からない。また、A部分の台形状の欠落は、発掘後に行われた復元時である可能性もある。

なお、鉢形土器の修復に際し丁寧なクリーニングが行われた結果、縄文の施文構成細部が観察できたため、実測図を改めている。

5. 縄文時代の埋葬習俗と国府遺跡の鉢形土器

縄文時代前期、日本列島で高度に発達した採集経済は発展段階に入り、縄文文化は各地に適応して特徴ある文化を発展させた。縄文時代の埋葬は、成人を墓穴に屈葬するのが基本としているが、前期には頭部に土器破片を被せたり、石をのせたり抱かせたりするものが出現する。幼児も甕棺墓に埋葬されるようになり、生業活動の高度化と生活の安定、定住化が、埋葬習俗を複雑化させたと考えられている。

国府遺跡「衣縫」「骨地」の縄文時代前期の埋葬が多様であることから、西南日本の縄文時代前期社会も埋葬習俗が同様に複雑化したことが窺える。国府遺跡は、縄文時代前期の埋葬習俗を知ることができる重要遺跡である。

大串第18号人骨の胸部に、この鉢形土器があったことは、従来「副葬」ととらえられてきた。副葬品として墓穴内に土器を納める例は、日本全国で縄文時代前期頃からしばしば行われているが、「人体上に土器を供える」例はほとんどなく、第18号人骨例は縄文時代埋葬としても特異であることが指摘されていた。この人骨は、縄文時代前期の人骨43体中6体しかない「珠状耳飾」装着例であること、頭部に土器片をかぶること、抱石葬であることなど、国府遺跡にある埋葬方法のすべての要件を満たしている。いわば「最も厚く葬られた」遺体であったが、今回、その土器に穿孔があったことが判明し、新たな要素が加わった。

6. 縄文時代の底部穿孔

現時点で国府遺跡の大串18号人骨に伴った鉢形土器は、「埋葬された人骨に伴った底部穿孔土器」の最古のものである点は注目に値するであろう。縄文時代の土器底部穿孔で縄文時代前期にさかのぼるものは、今のところ他の例が発見できない。

縄文時代中期前半、中部高地で住居の入り口に上下逆に埋められた大形甕形土器（逆位底部穿孔埋甕）に広く見られ、また墓地にある埋甕（甕棺）には、底部を大きく破壊する例があるが、穿孔とは異なる。

一般に縄文時代研究上の解釈では、埋甕には、住居の中に埋められる場合と屋外の場合の二つがあり、その機能は、幼児埋葬や出産時の胎盤（えな）収納と推測されている。甕棺と「えな壺」である。成人を埋甕にそのまま埋葬することはできず、骨化した遺体を片づける再葬墓もある。

屋外の埋甕は、縄文時代前期後半に少数事例があり、中期に増加する。屋外の埋甕（多くは墓

地を構成する)から幼児骨が出土した例があり、完形品の土器や下半部を打ち欠いた土器を甕棺としている。住居内の埋甕に収納された胎盤は残っていないので、「えな壺」であるかどうか証明はできない。また住居内埋甕で幼児骨が確実に出土した例はない。

7. 国府遺跡の底部穿孔のある鉢形土器

国府遺跡の大串18号人骨胸部上に置かれた鉢形土器に底部穿孔がある事実は、「土器の底を穿つ」行為が縄文時代前期後半までさかのぼること、それが埋葬に関わる行為であったことを明らかにした。これと、縄文時代の埋甕と国府遺跡例を比較して考えると、以下のようになる。

国府遺跡例で土器の底に穴を穿つのは、野外の埋甕の下半部を打ち欠くのと異なり、丁寧さの点で異なる。住居内逆位埋甕の穿孔例に類似している。鉢形土器の内容物が不明であるので、胎盤などが納められたかはわからない。埋葬人骨が男性である可能性も指摘されていることから、埋葬された本人の産褥との関係は推測できない。また、幼児埋葬の甕棺である可能性も検証できない。土器が横位で埋葬されたとすれば、穿孔の意味も埋甕のそれと異なっていると考えられ、「逆位底部穿孔埋甕」とは直接つながらないことになる。

国府遺跡の大串18号人骨の深鉢形土器は、成人男性の胸部上に置かれたということから、埋葬者に対する「副葬」や「供献」の意味が深く読み取れる。

鉢形土器の穿孔は、土器を破壊しないように丁寧に行われていることから、埋葬時に実用品の機能を喪失させてから供えることを行ったとみるのがよいだろう。実用品としての機能をうばう行為が行われたことに特徴があり、実用品をそのまま「副葬」・「供献」したものではない点を指摘したい。鉢形土器の口縁部ではなく底部を打ち抜くのは、土器の形を失わないための工夫であろうか。国府遺跡の他の埋葬、縄文時代例にはない、「実用品の機能を奪うという習俗」の存在が推定できる。

8. 埋葬習俗の背景

「副葬」・「供献」は、埋葬に広く見られる習俗であるが、死者の埋葬時に、遺愛の品を一部壊して埋葬する事例は、日本では歴史時代以降、現代まで各期の墳墓に散見される。それらは縄文時代前期とは時間的にも空間的にも離れすぎているので、直接結びつけることはできないが、そのような考え方や習俗が、しばしば時空間の広い範囲に発生した点は注目される。

深鉢形土器の底部に穿孔があったという事例が、縄文時代前期後半という、古い時期に認められ、それが国府遺跡の多様な埋葬方法の中でも「もっとも厚い埋葬事例」である大串第18号人骨にあったという点は、縄文時代前期の社会が、死者に対する深い精神世界の形成を果たしていたことをうかがわせる事例であろう。

縄文時代中期以降、各地に斉一性のある葬制が定着していく。前期に現れた底部穿孔や埋甕、甕棺、抱石葬、甕被葬などの埋葬習俗、玦状耳飾の装着習慣などは、時代が経るにしたがい、あるものは普及し、あるものは廃れていく。有名な抜歯の普及は後晩期になってからである。縄文時代前期のこのような様相は、文化史的な画期として重要であることを示しているといえる。国

府遺跡の鉢形土器の事例や、埋甕や甕棺墓、逆位底部穿孔埋甕などの行為の背景にある精神世界、習俗の出自と、縄文時代以降の系譜について、今後広く東アジア全体を視野に入れて研究していく必要があると考える。

おわりに

今回、関西大学博物館所蔵の重要文化財、国府遺跡の大串第18号人骨胸部上の深鉢形土器を修復するに際し、東京文化財研究所の精密な作業により、鉢形土器底部の状況をはっきりと確認できた。その結果、底部に穿孔があることが判明した。このことは大正7年に発掘されてから90年後に判明したのであり、発掘時の情報と資料から今回得られた事実が組み合わさって、縄文時代埋葬習俗の研究に新しい知見を付け加えることになった。この90年間の縄文時代研究の進展も、この知見の解釈に、大きな背景を与えるものとなっている。

今後修理された土器を、安全に展示公開ができることは意味深い。この資料を関西大学博物館で公開し、学術研究の推進の一助としていきたい。

引用・参考文献

- 天野末喜 2001 「河内国府遺跡における縄紋墓地と集落」『石川流域遺跡群発掘調査報告書』XVI
- 池田次郎 1988 「河内・国府遺跡の人骨」『橿原考古学研究所論集』第10号
- 池田次郎 1997 「国府遺跡の人骨」『国府遺跡の謎を解く』
- 岩井雍南 1917 「河内國府遺跡調査」(一～廿)『大阪毎日新聞』大正6年10月15日～31日
- 岩井雍南 1918 「河内國府第四回発掘調査」(一～十八)『大阪毎日新聞』大正7年8月1日～9月9日
- 角田芳昭 1981 「本山彦一翁と考古学 その2」『阡陵』3
- 関西大学博物館 1998 『博物館資料図録』
- 末永雅雄 1935 『本山考古室要録』
- 西口陽一 1983 「耳飾りからみた性別」『季刊考古学』第5号
- 濱田耕作 1918 「河内國府石器時代遺跡発掘報告」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第2冊
- 濱田耕作・辰馬悦蔵 1920 「河内國府石器時代遺跡第二回発掘報告」『京都帝国大学文学部研究報告』第4冊